

第60回国際歯科研究学会報告

歯周診断・再建学 多部田 康 一



平成24年12月14、15日に第60回国際歯科研究学会日本部会(60th Annual Meeting of Japanese Association for Dental Research)が新潟コンベンションセンター(朱鷺メッセ)にて開催されました。今回の学術大会は口腔生命福祉学科 山崎 和久教授を大会長として、私は準備委員長として開催準備にあたりました。本大会は例年秋頃に開催しており、今年も同時期の開催となりました。この時期の新潟での開催には天候に大きな不安があったものの、12月初旬の大寒波を幸運にも避けることができ、天候にも恵まれ、参加者333名、ポスター発表141題、海外参加者41名をもって無事に開催されました。当日は大会運営のため会場にて聴講する時間がほとんど無く、講演内容について十分お伝えすることができませんので、今回の学会報告においては概要についてご報告させていただきます。

今年は International Association for Dental Research (IADR) の日本部会として Japanese Association for Dental Research (JADR) が創設されて60周年を迎えました。今回の大会のテーマは『60years of the JADR – Future Perspectives of the Dental Science –』として、3つの特別講演と3つのシンポジウム、ポスター発表が企画されました。特別講演1、2においてはIADR会長 Dr. Mary MacDougall、及びKADR会長 Dr. Sang-Wan Shinより講演をいただき、特別講演3においては理化学研究所オミクス基盤研究領域 領域長 林崎 良英先生より

“New gene expression regulation world based on transcriptome analysis and its application to medical technology” というタイトルにて御講演いただきました。現在の医歯学研究においては分野を問わず細胞・組織における遺伝子発現やその機能の検討が行われていますが、私たちが普段使用するデータベースの mRNA (cDNA) 発現についての情報は、林崎先生らがこれまで行ってきた FANTOM (Functional Annotation of Mammalian Genome) プロジェクトにおける網羅的なトランスクリプトーム解析の結果に大きく依存しています。講演の中では近年明らかになりつつある Non-coding RNA (ncRNA) による遺伝子発現の調節についてもお話いただき、DNA からタンパク質が作られる転写・翻訳過程での遺伝子発現の複雑な制御機構における ncRNA の役割や、ncRNA をバイオマーカーとした診断への応用の将来的な展望について、最先端の情報を大変わかりやすく解説していただきました。講演を聞かれた先生方においてはとてもご満足いただけただけの様子であり、非常に有意義な特別講演となりました。

シンポジウム I においては— The Cutting Edge of Dental Science in Japan —として、歯科医学研究の最前線で御活躍される先生方の中から、中川 一路先生(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 細菌感染制御学)、福本敏先生(東北大学大学院歯学研究科 小児発達歯科学)、石丸 直澄先生(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 口腔分子病態学)、兼松隆先生(広島大学大学院医歯薬学総合研究科 歯科薬理学)より御講演をいただきました。シンポ

ジウム II においては「Impact of Oral Health on the Systemic Health; Lessons from Human and Animal Studies」というテーマにて仲野 和彦先生（大阪大学大学院歯学研究科 先端小児口腔保健学）、山下 喜久先生（九州大学大学院歯学研究院 口腔予防医学）、江國 大輔先生（岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 予防歯科学）、宮崎 秀夫先生（新潟大学大学院医歯学総合研究科 予防歯科学）より御講演いただき、私も演者として発表させていただきました。このシンポジウムでは、口腔健康と全身との関係について基礎研究から疫学的研究にわたり最新の知見を交えて講演をいただきました。シンポジウム III においては、Biological なアプローチをもって補綴学の分野で御活躍される先生方によるシンポジウムを本学生体歯科補綴学分野の魚島 勝美教授に企画していただきました。— Biological Perspective of Future Prosthodontics — と題し、江草 宏先生（大阪大学大学院歯学研究科 顎口腔咬合学）、牧平 清超先生（九州大学大学院歯学研究院 クラウンブリッジ補綴学）、秋葉 陽介先生（新潟大学大学院医歯学総合研究科 生体歯科補綴学）より御講演いただきました。

私自身は所々しか講演を聞くことができませんでしたが、いずれの講演からも JADR 会員の先生方の学術レベルの高さを感じられるものでした。また、この学会は英語を使用言語としております。特に若手の先生方の英語でのプレゼンテーション能力が非常に高いことに驚かされました。毎年 IADR において Hatton Award Competition という IADR の各部会にて Winner となった数名の代表者による若手研究者のコンペティションが開催されております。今年も 4 名が JADR の Hatton Award Competition winner として選出されました。JADR 大会におけるこの Winner による発表においても非常に素晴らしい発表が続き、やはり英語による発表能力が驚くほど高く、このような状態が続けば将来的に日本の研究者の国際的な活躍がさらに期待されるものと感じられました。

今大会の運営に関しては厳しい予算のなかでの運営において不安な点多々ございましたが、新潟大学の先生方より多数のご参加をいただくことに加え、講演者や発表者として御協力をいただくことにより無事成功裡に開催することができました。この場を借りまして本学の先生方に心よりお礼を申し上げます。



International Symposium on Human Resource Development towards Global Initiative 報告

特任助教（予防歯科学） 石 田 陽 子

2013年2月16日（土）、17日（日）に、タイ王国・ペッチャブリー県・チャムにて表記の国際シンポジウムが行われましたので、ご報告いたします。

本シンポジウムは、「国際イニシアティブ人材育成プログラム」の一環として、文部科学省の支援を受け、新潟大学歯学部とコンケン大学歯学部（タイ王国）の共催で開催されました。

「国際イニシアティブ人材育成プログラム」は2012年度に文部科学省より採択された3年間のプロジェクトで、大学院医歯学総合研究科・口腔生命科学専攻が推進している再生歯科医学的教育、国際口腔保健教育に焦点をあて、国内外で整備の遅れている再生医療に貢献できる人材育成と国際機関や国内機関の保健医療専門家の育成を目指したプログラムを開発・実施するものです。シンポジウムは本プログラムでコースを設定している再生歯科医学教育と国際口腔保健医療教育をメインシンポジウムとし、両大学からの発表者に加え、国内外から多くの講師を招き、活発な討論が行われました。

開会に際し、本学の生田孝至副学長（教育担当理事）、本学の前田健康歯学部長、コンケン大学の Nawarat Wara-aswapati CHAROEN

歯学部長から挨拶があり、本シンポジウムによる歯学教育・研究のコラボレーション促進への期待、また積極的に共催を申し出てくれたコンケン大学歯学部スタッフに対する感謝の意が述べられました。

本シンポジウムは5つのセッションから構成されました。

○セッション I

Regenerative Dental Medicine 再生歯科医学シンポジウム

座長の泉健次准教授（本学・口腔解剖学）のもと、国内外再生歯科医学分野のリーダー的存在を多数シンポジストに迎え、魅力的な演題が揃い、会場からも活発な質疑応答が行われました。なお、このセッションの開催にあたっては一部「歯学連携ネットワークによる口腔からQOLの向上を目指す連携研究」の支援を受けました。

1. 歯肉由来 iPS 細胞の再生歯科医学への応用：江草宏 助教（大阪大学・歯科補綴学第1教室）
2. 海洋資源を活用した骨・口腔粘膜の再生：柏崎晴彦 助教（北海道大学・高齢者歯科学）
3. 幹細胞による骨粗鬆症の骨再生：Premjit



新潟大学・コンケン大学歯学部共催シンポジウム



生田副学長・教育担当理事の開会挨拶

ARPORNMAEKLONG 准教授(タイ・プリンス オブ ソンクラ大学・口腔外科学)

4. 歯根膜組織のホメオスタシスにおけるメカニカルストレスの重要性：加来賢 准教授(本学・生体歯科補綴学)
5. 自家歯根膜細胞シートを用いた歯根膜再生：岩田隆紀 講師(東京女子医科大学・先端生命医学研究所/歯科口腔外科)

○セッションII

Global Oral Health Science Education 国際口腔保健学教育シンポジウム

「国際イニシアティブ人材育成プログラム」の第一の目的は専門家育成カリキュラムの開発で、現在は Yupin SONGPAISAN 特任教授を中心に、国際口腔保健医療専門家育成コース(大学院博士課程)が作成されている途上です。本シンポジウムではまず Yupin 教授よりこのカリキュラムの主旨と内容について概説され、次いでカナダ・ブリティッシュコロンビア大学歯学部長で歯学教育において著名な Charles SHULER 教授から、Global Oral Health への展望を交えて本カリキュラムを構築する上でのゴール設定の重要性について講演いただきました。さらに、タイ・タマサート大学元歯学部長である Prathip PHANTUMVANIT 教授より、本カリキュラムの特色の一つである学外フィールド実習(エクスターンシップ)を効果的に行うための国際的なコラボレーション促進の重要性について講演をいただき、本学からは小川祐司准教授(予防歯科学)より、他先進国に比べ日



生体歯科補綴学・加来賢准教授による講演

本では国際口腔保健専門家育成が立ち遅れており、歯科界全般の意識改革が必要であると提言がありました。

その後の質疑応答では ASEAN 各国の歯学部長や米国の参加者から本カリキュラムへの意見と関心が寄せられ、活発な議論が繰り広げられました。今後の国際口腔保健医療専門家育成に大いに活かされることが期待されます。

○セッションIII

Education and Research Collaboration 教育・研究の国際コラボレーションを目指して 新潟大学/ASEAN 歯学部長会議

新潟大学/ASEAN 歯学部長会議と題して、タイ国内はもとより ASEAN 諸国の大学歯学部長・関係者など20名参加のもと、新潟大学歯学部の国際交流・留学生受け入れ・共同研究推進に対する現在の取り組みを説明し、意見交換を行いました。これまでの実績を踏まえ、アジアにおけるフォーカルポイントとして、また WHO 世界保健機関協力センターとしての本学の教育・研究への期待は大きく、face to face での各大学代表者との議論によりさらなる交流の推進が確認されました。

○セッションIV

Advanced Research Seminar 若手研究者向けアドバンスド・リサーチ・セミナー

今回、研究発表を行った若手研究者はすでに論文まとめに入っている大学院3年生以上で占められました。そこで、「自分の研究をいかに今後につなげていくか」をテーマに本セミナーが企画され



Global Oral Health Science Education シンポジウムでは活発な議論がなされた



コンケン大学・Dr. Waranuch PITIPHAT による教育講演



一般口演。生体歯科補綴学・魚島教授の発表

朝食をとりながらの新潟大学／ASEAN 歯学部長会議。新潟大学歯学部留学生受け入れに対する取り組みに対して多くの質問が寄せられた

ました。座長の小川祐司准教授のもと、Charles SHULER 教授（カナダ・UBC）からは最新の科学的知識を学び歯学教育に活かすことの重要性、また Waranuch PITIPHAT 教授（タイ・コンケン大学）からは歯学・口腔健康科学における Practice-based research（臨床を基とした研究）という近年の潮流について経験を交えながら講演いただきました。

若手研究者にとっては、学位研究が一段落すると臨床をやりながらそれを継続していくことがなかなか難しい現状において、メンタリティの保ち方も含め、とても参考になる教育講演であったと思われま

○セッションV

研究発表

本シンポジウムは「若手研究者派遣事業」からの支援を受けており、大学院生を含む若手研究者の研究発表が奨励され、多くの若手研究者が国際



歓迎レセプションではコンケン大学の大学院生がタイ・ダンスを披露してくれました

学会での発表の機会を得るために参加いたしました。

2 日間にわたり、21 題の口演発表と 12 題のポスタープレゼンテーションが行われました。本学からは、口腔解剖学、口腔生理学、予防歯科学、齲蝕学、顎顔面外科学、摂食嚥下リハビリテーション学、包括歯科補綴学、生体歯科補綴学、口腔生命福祉学の各分野から合わせて 13 名が発表いたし

ました。本学とコンケン大学のほか、タマサート
大学やタイ保健省から、国内では九州大学歯学部
から2名の先生が発表され、シンポジストも含め

国内外参加者が互いの研究を知り交流できるよい
機会となりました。



SCRP 参加報告

歯学科5年 水 嵐 一 尊

2012年度 SCRCP に参加させていただきました、歯学科5年生の水嵐一尊と申します。

SCRCP について簡単にご説明させていただきますと、SCRCP とは Student Clinician Research Program の略で、学生が主体となって研究発表を行う大会です。世界中で開催されており、日本では毎年8月に東京の新歯科医師会館で行われています。参加する学生は研究活動の内容をポスタープレゼンテーションにまとめて発表を行います。また、発表と質疑応答は全て英語で行われます。研究テーマは基礎部門と臨床部門に分けて行われ、日本大会は今年度で18回目となります。それぞれの分野の中で最も優秀な発表を行った学生は、ADA Annual Meeting(アメリカ歯科医師会年次総会)で発表をする機会を得ることが出来ます。

私がこの大会を知ることになったきっかけは、昨年の SCRCP の研究の被験者になったことでした。私は将来大学院へ進みたいと考えており、大学院での研究に興味を持っていたのですが、学生の頃から研究に携わることが出来るのは貴重な体験ではないかと思い、今年度の SCRCP に参加することを決めました。

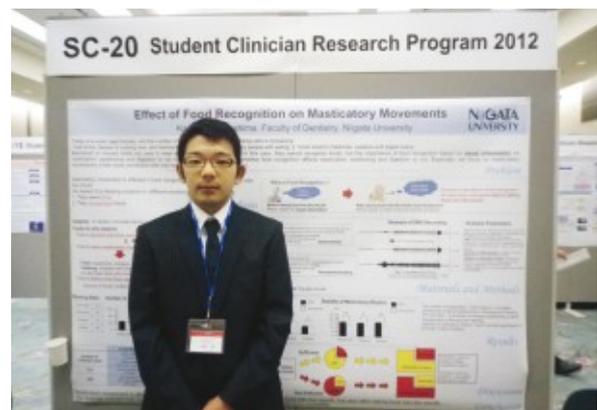
その後、生体歯科補綴学分野の長澤麻沙子先生にファカルティ・アドバイザーになっていただき、共同研究者として歯学科3年の千田正君、田村光君を加え、昨年末に研究テーマを決定し、約半年間研究活動を行ってきました。研究は口腔生理学分野の山村健介教授のご指導の下、黒瀬雅之先生、Rhaman MD Mostafeezur 先生、北川純一先生、医局の先生方から丁寧で親切なご指導を頂きながら進めました。

研究テーマは「食物の認知が咀嚼運動に及ぼす影響」で、食物を摂取する前に行われる視覚情報による食物の認知は、その後の咀嚼運動に影響を

及ぼしているかどうかを調べるという研究です。実験方法を完成させるまでに特に時間がかかり、考えた実験方法を私達がお互いに被験者となって実施し、検証を繰り返しながら練っていきました。

また先ほど述べたように発表は英語で行われるのですが、その原稿やポスターを作成する際も、山村教授と黒瀬先生にご指導いただきました。文法や単語を正していただいただけでなく、アクセントや間の置き方といった英語の読み方のポイントも教えていただきました。最初は原稿を見ながら英語を途切れ途切れに読み上げているような状態でしたが、先生方に鍛え上げていただいた結果、最終的には原稿を丸暗記して自然な流れで発表することができるようになりました。

残念ながら入賞することは出来ませんでした。SCRCP は自分にとって貴重な経験となりました。普段先生方のされているような研究に自分も携わることができたことも勿論ですが、大会に参加した他大学の学生の方々と交流を持つことが出来たことも、SCRCP に参加しなければ得ることが出来なかった経験でしょう。今後は、サポートという立場から SCRCP に関わっていただけたいと思っております。最後に、研究活動を支えてくださった多くの方々に、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



2012年度SSSV（ショートステイ・ショートビジット）プログラムによる短期留学受け入れ

特任助教（予防歯科学） 石 田 陽 子

多様な学生の受け入れや派遣を支援するプログラムとして、日本学生支援機構（JASSO）による留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット）が2011年度より開始されました。新潟大学歯学部もこれに参加し、本年度はインドネシア大学、ガジャマダ大学（いずれもインドネシア）、タマサート大学、コンケン大学、チェンマイ大学（いずれもタイ）、国立陽明大学（台湾）、ペラデニヤ大学（スリランカ）、コアウイラ自治大学（メキシコ）、ミナクシ・アマル歯科大学（インド）、ムハンマド5世大学（モロッコ）の各歯学部より10日～1ヶ月程度、歯学部生／大学院生を短期交換留学生として受け入れました。

歯学部学生は、口腔解剖学、口腔生理学、予防歯科学、摂食嚥下リハビリテーション学、小児歯科学、口腔再建外科学、顎顔面外科学、生体歯科補綴学、歯科矯正学の各分野と、インプラント治療部、総合診療部をローテーションし、それぞれの教員による指導の下に診療見学をしたり講義を受けたりしました。また、クラブ活動に強い関心がある学生もあり、歯学部だけでなく五十嵐キャンパスで活動しているクラブ活動を見学していました。

週末には月岡温泉や会津若松旅行に行くなど、

本学の短期留学経験者とともに楽しい時間を過ごしました。

また大学院生では、コアウイラ自治大学より修士課程の学生が1名、齲蝕学にて1ヶ月、ムハンマド5世大学より博士課程の学生が2名、予防歯科学／微生物感染症学にて2週間滞在・学修いたしました。

以下、コアウイラ自治大学5年生のGerardo君による滞在記（抜粋）を紹介いたします。

I enjoyed a LOT my time here, I have now a wider view of dentistry, how different is dentistry compared to Mexico? Well, of course the basics are the same, but you have more hi-tech and techniques vary a little sometimes, I think in Mexico we have more clinical practice compared to here. You also have much more research, its incredible all the research and experiments that are made in dental school. Everyone in dental school works so hard and are always so organized with every-



写真1：インドからの学部生。ローテーション学修で生体歯科補綴学の見学



写真2：タイ・台湾・スリランカの学生との会津若松研修旅行。赤べこの絵付け体験中



写真3：モロッコからの大学院生。微生物感染症学で実験中



写真4：メキシコの学部生。摂食嘔下りハビリテーション学で実習中

thing.

Japan is completely a different world, it's hard for me to choose what's the biggest difference because everything is so different! But I think the most I like is the culture of respect you have for so many things and between people! I liked that very much and you can see it everywhere, from going to a regular store to meeting someone, etc!

I had a wonderful experience and I feel that now I see dentistry very different with many many more options and opportunities than just doing clinical work.

Thanks again to all the great doc-

tors I met, who dedicated their time and shared a little bit of their immense knowledge with me.

Thanks to everyone for being always so friendly! I cannot say enough thanks! I cannot express all my gratitude in these report, I would like to name many of you but this is supposed to be a "short" report! And that will take too long! I hope you can understand! I take with me unforgettable memories, you all made my stay here amazing! I hope to see you all again very soon!

またね!!

Gerardo Martinez



SSSV 報告—インドネシア大学を訪問して

歯学科4年 竹内涼子



2012年夏、インドネシアは首都ジャカルタにあるインドネシア大学で日本学生支援機構(JASSO)による留学生交流支援制度(ショートステイ・ショートビジット)による、2週間のショートビジットプログラムに参加した。

滞在中は、現地の歯学部生宅にホームステイをさせていただき、現地の家庭を味わいながら学生と近い形で生活できた。

ジャカルタはアジア有数の世界都市であり予想以上に発展していた。上を見渡せば多くの綺麗な高層ビルが目立つ一方で、目線を下げると無数の車とバイクによる長い渋滞。通信と合わせてインフラの遅れこそあるが、まさに新しくて勢いのある大都会という印象を受けた。インドネシア大学歯学部はそんな街の中心部にキャンパスを構えている。

学生はとにかく勤勉である。インドネシアの歯学部は5年制で4年生から臨床実習が始まるため、試験や研究発表含め凝縮されたカリキュラムが組まれており、勉学への姿勢が熱心であるのももちろん、プレゼンテーションや意見する態度も非常に積極的であった。なるほどと感じたのは、使用している教科書が英語だということだ。インドネシア語に訳された歯学系教科書はほとんどなく英語のものが当たり前なのだそう。歯科途上国の環境が学生の英語を堪能にしているのだと思うと、英論文の抄読ですら非日常である私たちには日本語が当然の環境は豊かすぎるのかもしれないと感じた。

プログラムでは、1日に2ずつ計11の科をまわることを基本として学外の医療施設や小学校を訪問し、最終日にプレゼンテーションを行うもの

だった。全ての科に共通して最も印象に残っていることは、先生も学生もディスカッションを非常に大切にしているということだ。彼らは、自分の話したいことは積極的に話し、聞きたいことはとことん質問する姿勢でいた。最初はその雰囲気から圧倒され、内容を整理できないまま話してしまったり本意とは違う意見で場をおさめてしまったり……そして話せば話すほど日本の事情について上手く説明できない場面に遭遇し、自分が思っていた以上に自分の国を知らないことに気付かされた。相手が興味を持ってくれたことについて、自分の無知のために話せないことはとても情けなく悔しかった。

一方で反面教師として学びたい状況にも何度も遭遇した。清潔域と不潔域の大雑把さ、子どもがユニットにぶら下がったり歯科用インスツルメントで遊んでいること、またその状況を周りも放置していること……「お国柄」で済ませていい問題なのか疑問に思うこともあったが、このプログラムを通して良いこともそうでないことも含め、様々な場面で衝撃を受けた。

ステイ先での生活は非常に充実しており、ファミリーは皆明るく優しくあたたかかった。ちょうどラマダン(イスラム教の行事である断食期間)ということもあり、毎朝4時半までに朝ごはんを



食べ終えたり、お湯の出ないシャワーだったことは少し辛かったが、鶏肉料理、カレー、フルーツを主とした家庭料理は私にとっては新鮮で、家族と一緒に素手でおいしくいただいた。またホストバディとは滞在中で本当に沢山の話をした。将来のこと、恋愛のこと、学校の愚痴……国は違えど同じ世代の女の子、似たような考えを持っていることを知って嬉しかった。

この2週間で学んだことや感じたことは本当にかげがえのないものとなった。歯科に関することのみならずいろんな価値観に触れられた。ありきたりな「楽しかった」や「感謝」では今後の変化をつくれぬ。この経験を自分なりに咀嚼し、学生生活や将来に生かす糧にして一步一步歯科医療人への道を歩みたい。

ミニコラム

素 顔

硬組織形態学分野・技術専門職員 監 物 新 一



皆様こんにちは。硬組織形態学分野（旧口腔解剖学第一教室）で技術職員をしております監物と申します。私は昭和62年に当時の小澤英浩教授（元歯学部長・現名誉教授）が主宰されていた当教室に技官として採用され、平成25年4月で歯学部生活も早や27年目に突入します。

現在の業務は主に学部教育での肉眼解剖学実習の諸準備と、研究室の技術的サポートです。まず解剖実習では医学部の解剖学教室との御献体の搬出入の打ち合わせや、実習中の解剖器具・タオル・消毒液・保存液の準備などを担当しています。解剖実習を経験した学生さんの中には時々実習室に現れる小泉純一郎風の髪型をした大柄なおじさんの姿を覚えている人もいらっしゃるかもしれません。研究室のサポートとしては電顕やEPMAの試料作成、マイクロCTの撮影、パラフィン切片作成と組織染色、実験試薬の準備、飼育マウスの管理などが挙げられます。

趣味は釣りとアルビの応援で、ホームゲームはほとんど全試合観に行っています。週末に6歳と2歳の孫の世話をするのが最近の楽しみです。

これからも教育と研究の支援を通して新大歯学部にご貢献して参りたいと思いますので皆様今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

SSSV 報告—台湾紹介

歯学科3年 佐藤新一

今回、日本学生支援機構 (JASSO) による留学生交流支援制度 (ショートステイ・ショートビジット) により、海外の歯学部で勉強をするプログラムに籍を置かせていただきました歯学科3年の佐藤新一といたします。私はこれまで、海外に行く機会がほとんどなかったため今回のプログラム参加で、海外の大学を初めてみる事ができました。今回は台湾の陽明大学に2週間研修させていただきました。

私が台湾に行く前に立てた私の目標は主に二つありました。一つは将来、歯科医師として台湾と深く関わる仕事がこなせるように歯科について学ぶ。もう一つは台湾で英語を学ぶことにより、自らの英語能力を向上させることです。二週間の留学期間を終え、改めて振り返ってみると、非常に有意義な留学であったと思います。

歯科研修内容は一週目に台湾の拠点病院の一つである Veteran General Hospital (VGH) で研修し、二週目は Yang-Ming University Hospital と Taipei City Hospital で研修させていただきました。VGH では Prosthodontics, Endodontics, Periodontics, Oral Surgery, Pediatrics, Orthodontics を見学させていただきました。

した。

Taipei City Hospital では、関心がある科を指導先生に尋ねられ、嚥下障害と答えると神経内科、脳神経外科病棟を見学させていただきました。また、台湾の言語聴覚士と知り合う機会があり大変貴重な経験となりました。

もう一つの目標である英語能力は、実際交流してみると私の英語能力が想像以上に低く、外国で生活することが困難なことを認知することができました。台湾は幼少より英語と中国語について学んでいるため、中国語が話せなくても英語が話せればどこでもコミュニケーションがとれます。また、カルテが全て英語で記載されていたのは、私にとり衝撃的でした。いつか日本もカルテが全て英語になる日がくるかもしれません。

日本と台湾の文化の違いを知ることができたことも大変勉強になりました。研修中どの病院でも話題として取り上げられていたのは、Betel nut です。Betel nut は日本でビンロウと言われています。噛むことで爽快感が得られるとのことであり、日本で言えば、麻薬に相当すると思います。台湾では Betel nut が口腔がんの要因となることを強く啓発しており、病院内でもポスターで掲



口腔外科の手術場面を見学させていただきました。貴重な体験ができ勉強になりました。



台湾のマangoはとても甘くておいしかったです！

食禁止を啓発していました。また、カンファレンスに参加させていただいた際も Betel nut の摂食歴を話しており、台湾にとり Betel nut は根付いている文化のため、容易に改善は難しいと思われました。

台湾で生活して感じたことは、台湾の方はとても親切であり、買い物をした際店員も日本人である私に中国語が通じないと分かるとすぐ英語や筆談に切り替えてくれ、大変感銘を受けました。国民性の違いと一言で説明するのは簡単ですが、そ

の国民性を養成する土壌が台湾にあると思われました。

以上のように、私の留学生活は非常に実り多いものとなりました。歯科の診療科を回れたこと、3ヶ所の病院を見学できたことは得るものが大きく、必ず今後の人生に大きくプラスに作用したと思います。ここで得ることができた知識とそれ以上の経験を、今後残っている学生生活や、その先の将来に十分役立てたいと思いました。



SSSV 報告—短期留学を終えて

口腔生命福祉学科1年 塚田真央



私は昨年の8月に日本学生支援機構(JASSO)による留学生交流支援制度(ショートステイ・ショートビジット)という交換留学のプログラムで、タイのタマサート大学に行かせていただきました。約2週間、主に現地の大学病院で見学をさせていただきながら、タイの歯科医療について学びました。治療見学では、一般診療から口腔外科で扱う重い症例など幅広い分野にわたる治療を見学させていただき、日々新たな発見を得ることができました。また、現地の学生が診療している様子を見学させていただける機会が何度かあり、治療内容について英語でディスカッションを行いました。それは決して簡単なことではなく、互いに言葉を伝え合い理解するのに時間がかかることもありました。言葉や国境を越えて何か一つのことを共に学べたことに喜びを感じたとともに、とても貴重な経験ができたと感じています。私は1年生で行かせていただいたので歯学に関する専門的な知識はもちろんほぼなく、初めは少し不安がありましたが、現地の先生方や学生の説明がとても分かりやすく、新しいことをたくさん学ぶことができました。また、新潟大学で前期に行った早期臨床実習で得た体験や、先生方や先輩から教えていただいた様々な知識によって、この留学の治療見学をさらに有意義なものにすることができたと思います。

私はこの短期留学で、新しい知識を得ることができたのはもちろんですが、特に現地の学生の勉学に対する意欲の高さにとても驚き、自分の勉学に対する姿勢を改めて考えさせられました。先生

が治療している際、少しでも多くの知識を得ようと多くの学生が周りに集まり、その症例についてipadを片手に学生同士がディスカッションする姿はとても印象的でした。また4年生や5年生の授業を一緒に受けさせていただく機会もあり、その中に、バンコク付近で開業している歯科医師の先生が大学に来て行った講義がありました。その講義は主にタイ語で行われましたが、先生のアシスタントのプレゼンの際は英語で行われました。英語を話せる学生はたくさんいますが全員ではないため、その講義内容を英語からタイ語に訳す必要があり、生徒が自発的に名乗り出てクラスみんなに訳していました。先生と1人の生徒が進めていく授業の様子は、日本ではあまりない光景で、学生のポテンシャルと意欲の高さも同時に学ぶことができた講義でした。

また、約2週間タマサート大学の学生と、授業や食事を共にして一緒に時間を過ごし、他愛もない会話をしていく中で、勉学のこと以外でも彼らからたくさん学ぶことができたと思っています。今後もNEXUSの一員として、多くの留学生と関わり合いながら共に学ぶことができるよう、私自身勉学及びコミュニケーション能力の向上に力をいれていきたいです。

私は口腔生命福祉学科の生徒として、滅多に経験できないような貴重な経験を多くさせていただきましたし、1年生という早い時期に、将来自分はどうのように歯学に関わっていきたいのかを考えさせられたとても良い機会になったと思います。私自身1年生であり、まだ教養科目しか学んでいませんが、今後の勉学への姿勢を考え直し、この留学を通して学んだこと、今感じていることを忘れずに、頑張っていきたいと思っています。

東日本大震災 継続的な支援の取り組み

口腔保健学分野 葭原明弘

2011年3月11日に東日本大震災は発生した。2012年12月現在、15,879名の方が死亡され、2,712名の方が行方不明のままである。未だ4万人以上の方が仮設住宅等で避難生活を送っておられる。1000年に1回といわれるような大地震の被害は甚大なものとなった。

新潟大学は地震発生当初から医療支援部隊を編成し支援活動を行ってきた。歯科も同部隊に加わり地元歯科医師会との連携の中で作業を進めてきた。また、新潟県内に避難されている方々に対しても地元歯科医師会や歯科衛生士会を中心に支援活動が展開されてきた。

近年、地震支援に歯科は欠かせないものとなってきた。歯科診療所が機能していない中では、治療途中での急性症状の発生、または水道が使用できない中での義歯を含む口腔清掃の不良は重要な課題である。阪神・淡路大震災や中越地震、中越沖地震において、歯科診療部隊の支援が実施され大きな成果をあげてきたことはまだ記憶に新しい。今回の東日本大震災の発生にあたっては、歯科関係においても、全国各地より支援が寄せられた。ポータブルユニットを用いた歯科診療では、急性症状の緩和に主眼をおいた処置が実施された。一方、避難所に避難されている方に対しては、直接避難所を訪問し、避難されている方に対する歯科相談、および義歯清掃、高齢者への口腔ケアが実施された。

このような中、産官学民が一体となって「ヒューマンケア 心の絆プロジェクト」が立ち上がった。主催は、ヒューマンケア・心の絆プロジェクトおよび朝日新聞社、共催として、グラクソ・スミスクライン株式会社や公益財団法人結核予防協会等が名を連ねている。新潟大学歯学部は口腔生命福祉学科および予防歯科学分野を中心に同プロジェクトに発足当初より参加してきた。息の長い被災

地支援と地域医療再生を目的としている。

2011年には岩手県、宮城県、および福島県において56ヶ所で支援活動が実施された。参加人数は1,633名、総スタッフ数は848名であった。ともかく多くの被災地を訪問し、被災者の皆さんとの絆を深めることに主眼が置かれた。健康セミナーやお茶会、子供向けのお絵かき会やスポーツ大会、音楽会なども企画された。2012年には、同じく3県内の3都市（宮古市、気仙沼市、郡山市）で実施され、426名の方が参加した。地域医療の現状と課題を考えるシンポジウムも開催され、さらに全ての会場において、健康相談会や仮設住宅訪問も1,150ヶ所で実施された。総スタッフ数は437名であった。コンセプトは「被災地を忘れさせない」である。

我々は、同ヒューマンケア・心の絆プロジェクトにおいて健康相談グループに加わり、各会場において健康相談会を実施した。お口の体操や歯磨き指導、口腔の症状確認等を実施した。参加された全ての方に、歯磨き粉や歯ブラシ等のお土産をお渡しした(写真1)。だいたい1人当たり10分程



写真1. 歯科相談コーナー

度を予定しながら実施した。受けられた方からは、丁寧な指導に十分満足した様子であった。また、同日に行われたシンポジウムにおいては、地震発生地域における長期にわたる歯科医療、歯科保健の継続の重要性について講演を行った（写真2）。本事業に対し継続して参加することは被災地の方々に対する実質的な支援はもちろんのこと、医科関係、一般民間企業、健康推進企業関係、等関係者に歯科保健の重要性を分かっただく上でも重要な取り組みと考えている。

地域に開かれた大学でありたいと願っている我々にとって今回の地震に対し支援することは至極当然である。職員をあげての支援により大きな成果を生むことができた。ややもすると、PR先



写真2. シンポジウムでの講演

行の支援になりがちなかで、我々の支援は地元住民および歯科医師、歯科衛生士を中心に据えた、実りある支援を行うことができている。

